

# OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



## プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 尾花 英之  
所属 (School) 工学域 電気電子 情報工学課程  
学年 (Grade) 2年

留学先 (Name of overseas institution)  
イギリス カンタベリー  
コンコルドインターナショナル  
留学期間 (study abroad period)  
2018/2/10~3/5  
記入日 (Date) 2018/03/19

## 留学レポート Study Abroad Report

僕は2018年の2月から約3週間、イギリスのカンタベリーという街に留学しました。イギリス研修に参加しようと思ったきっかけは、趣味である海外テレビ番組の鑑賞の際に話の「オチ」をつかむことが出来るような英語力や文化的知識を身に付けたいと思ったからです。海外の人とコミュニケーションを取る時も同じで、やはりジョークやユーモアを理解するためには相当な語学力と文化的知識を体得する必要があります。僕はイギリス研修を通して少しでもそのような部分の視野を広げようと考えていました。

そして春休みが始まってすぐ、15人ほどのメンバーでイギリスに向かうことになりました。カンタベリーはロンドンからバスで2時間ほどのイギリス南東部に位置する街で、人がよく穏やかな街だなと最初に感じたのを覚えています。そして、コンコルドインターナショナルという語学学校の斡旋で事前に決まっていたホームステイ先での生活が始まりました。ホストファミリーのBennet 夫妻は生徒の受け入れに慣れている様子で、「君は素直そうだから気に入った！」と笑いながら、親切に対応してくださりました。しかし、初めはホームステイ先で失敗してしまうこともありました。今でも鮮明に覚えているのは、初日に学校から帰るとBennetさんが僕をじっと見つめてこうやってきたことです。「鍵、閉めていったでしょ？何で外の鍵かけて出て行くの？」(もちろん英語で言ってきました)一瞬、訳が分からなくなりました。鍵はしっかり閉めて行ったはずだし、そもそもなぜ閉めて行ったことに対して怒っているのか。普通、怒られるとしたら閉めなかった時だろうと。彼女が怒っている理由はこうでした。家の鍵はオートロックで扉を締めるだけで鍵がかかる、外側につけられている鍵は帰宅時に開ける専用でその鍵を外から閉めてしまうと内側からドアが開けられなくなる。つまり、僕がホストファミリーを閉じ込めてしまっていたのです。申し訳ないことをしたと思い謝った後、僕は部屋で一人、日本語で叫びました。「いやその鍵の需要、どこにあるねん！！」その時にふと思ったのが、このおかしさ・歯がゆさを英語で伝えることができればいいなということです。すぐさまBennetさんのところに行き、「自分の家では鍵の構造が違って、外の鍵を閉めて行かないと僕の母親はさっきのあなたのように怒るのです。」と英語で説明しました。すると、Bennet 夫妻は「真逆で驚いた！」と大爆笑してくれました。それからの生活では文化の違いから「面白さ」を見つけることが楽しくなって色々なことを発見できたので、今思えば最初の大失敗がすごく良い経験だったのではないかと感じています。ただ、外から鍵をかけたことは未だに反省していません(笑)

文化の違いを感じたのは語学学校でも同じです。コンコルドインターナショナルには様々な国からの留学生たちがやってきていました。クラス分けで同じクラスになった友達は、スペイン・イタリア・韓国・中国・カザフスタンと様々な背景を持った人たちでした。毎日出席確認の時に、昨日の夜ご飯のメニューを先生に伝えるのが恒例になっていたのですが、同じ食事に対してもみんなの評価はバラバラでした。そんな中で、イタリア人の男の子は毎日「Pasta」と答えていて思わず横の席で笑ってしまいました。本人に聞いてみると、「俺はパスタって言っとけば何とかなる」そうです。

彼のジョークで僕たちは完全に打ち解け、仲が深まりました。面白おかしい話をしつつも語学学校に通っていた仲間たちは夢や将来設計を持って集まった志の高い人たちばかりでした。パイロットになりたいと言っていたスペイン人の男の子もいれば、世界中を旅するために英語を学んでいる韓国人の女の子もいました。彼ら彼女らは、目標がしっかりしていて自分の意見もしっかり持っていたように思います。授業で理解できなかったことがあると全体の進行を妨げてまで質問をしており、その様子に圧倒されました。日本ではよく「意識高い系」という言葉を耳にします。これは流行り言葉で、主に自分の言葉に行動が伴っていない若者を揶揄するものです。僕が語学学校で出会った人たちは皆、意識も行動もしっかりしていて、こういう若者を「志高い系」と呼ぶべきではないかと留学中に思いました。夢を持っている人は志を持っているということも語学学校で学べた大きなことの一つだと思います。このように学校では、月曜日～金曜日までの All English の授業以上のことが学べた気がします。もちろん授業内容も事前にクラス分けがあったのでちょうど少し難しい内容ができて、特にリスニングにおいては帰国後に成長を実感できました。



(語学学校のクラスメイトと)

イギリスにいる間、金曜日の午後と土日は自由行動だったので、ロンドンやドーヴァー、グリニッジ、ケンブリッジといったあらゆる有名な街を友達とともに巡りました。中でも印象的だったのは、ロンドンにある有名な劇場で『レ・ミゼラブル』を鑑賞したことです。この作品は映画で繰り返し観ていたのですが、英語での公演でも特に支障は無かったです。普段、舞台鑑賞をする機会がほとんどなかったので舞台上の演出の工夫や大道具のスケールがどれも新鮮で圧倒されました。今まで映画やドラマで感動してもほとんど泣いたことのなかった僕ですらクライマックスでは自然と泣いたので、イギリスの老舗舞台には人の心を震わす何かがあるのではないのでしょうか。それは長年、舞台の街としても栄えてきたロンドンの歴史にも関係しているものではないでしょうか。ロンドンの他にも上に挙げた通り様々な場所に行き、多くの文化や景色を肌で体感しました。その肌で感じた思い出の1つ1つは自分のうちに留めておきたいもので、たやすく「いいね」に替えられてほしくはないものばかりです。写真が容易にシェアできるこの時代においても、やはり自分で実際に足を運び目にしたものと感じたことは SNS 等では到底伝えられるものではないし、本当の意味での共有はできないと感じました。そう感じられたのもこのイギリス研修が本当に素晴らしい経験だったからだと思います。



(クイーンズシアターにて)

この留学体験記を読んでいる皆さんの中には、「大学生のうち少し長めに海外に行ってみよう」と思っている人は多いはず。そう考えているのであれば、たとえ批判されても、ぜひ行ってほしいなと個人的には思います。その際、日本で過ごすよりは確実に費用がかかりますから、海外留学チャレンジ奨学金や後援会の奨学金制度などを利用することをお勧めします。そして支えてくれる人たちに感謝して、かけがえのない経験を存分に楽しんでください！